

桜島

第17号
 令和5年(2023年)
 4月2日
 発行所
 俳人協会
 鹿児島県支部
 支部長 淵脇 護

ウイズコロナの中

支部で結束を固めよう!



支部長 淵脇 護

治療薬もなく、死者は依然続出する中で、収束の兆しは見えないままです。そうした中で、支部役員会は今年の執行予定を次のように審議しました。

- ①第3回春季俳句大会(募集句) 募集期間 2月1日～2月28日
- ②公社俳人協会鹿児島県支部総会 鹿児島市勤労者交流センター 4月2日(日) 10時受付 10時30分開会
- ③吟行俳句会 4月2日(日) 投句締切12時 句会13時～16時
- ④令和5年度桜島俳句大会 募集期間 8月7日～9月9日

◆当日の部

10月15日(日) 13時～16時
 国民宿舎レインポー桜島

第3回春季俳句大会の選者には、本部から今井聖(俳人協会理事・「街」主宰)先生をお願いしました。副支部長の中間秀幸氏の退任にともない、後任に山之内赫子氏が就任の予定です。なお、第16回九州俳句大会(佐賀大会)は、延期の模様です。

令和4年度俳人協会 鹿児島県支部行事について

◎支部総会・吟行会

青天に桜咲き満ちる4月2日、10時より令和4年度鹿児島県支部総会が鹿児島市勤労者交流センターにおいて開催された。昨年に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のために少人数での開催。

令和3年度の事業報告・決算・監査報告、令和4年度の事業計画・予算が提案され、承認された。また、会計担当を山之内赫子氏から池田貴之氏に交代することも承認された。吟行会は春季俳句大会と改称して募集句による紙上大会として実施したところ、84名、296句が寄せられた。11時より投句者による互選、選者選の結果発表と入選作品の最終選考を行い、12時に終了した。(大川畑光詳)

大会賞

野を焼いて一枚めくる農暦

小川 莎良

優秀賞

引鶴や子には語らぬ捕虜のこと

藪 孝湖

鶴引くや北の戦火の収まらず

大川畑涼子

チョーク絵の板書大きく卒業す

松木 菌かつ子

牛飼に生まれて老いて花馬酔木 山口雄二

春の日を容れ狛犬の口まろし

上野ミチ子

立春や光を刻む花時計

藤元睦子

薔薇の芽や鍵のつきたる子の日記

堀 芳江

島大根引きてよろめく大地かな 窪 昌子

淵脇 護

茶毘を待つその間も花のひとしきり

池田貴之

選者特選(五十音順)

大川畑光詳選

引鶴や子には語らぬ捕虜のこと

藪 孝湖

折田 幸弘選

立春や光を刻む花時計

藤元睦子

徳田 正樹選

おくるみの嬰すやすやと露の臺

池田貴之

中間 秀幸選

鉄幹の万蕾固く春寒し

池田貴之

長柄 英男選

茶毘を待つその間も花のひとしきり

淵脇 護

濱田 彰典選

てのひらに孤独ころがす弥生かな

白坂道代

淵脇 護選

引鶴や子には語らぬ捕虜のこと

藪 孝湖

實來喜代子選

天翔ける嬰の泣き声桃の花

東 良子

山之内赫子選

鶴引くや北の戦火の収まらず

大川畑涼子

和田 洋文選

井に洗ふ刃毀れの鋏山笑ふ

井龍三枝子

◎令和4年度桜島俳句大会

本年度より桜島俳句大会は募集句の部、当日句の部の二本立てで実施することになった。これは、コロナ禍で句会の中止が続いていること、高齢化で吟行が困難な方が増えていること等を考え、できるだけ多く俳句創作や交流の機会を確保するための対応である。

桜島俳句大会は10月16日(日)国民宿舎レインボー桜島で開催し、事前募集句に80名、276句、当日句には47名、136句の投句があった。互選の結果、次のような作品が選ばれた。なお、募集句の表彰も淵脇護支部長の総評の後、当日句の表彰と併せて行われた。(大川畑光詳)



【募集句の部】
大会賞(俳人協会鹿児島支部賞)

大根蒔く熔岩の際まで畝を立て

中間恵子

南日本新聞社賞

噴く島に嫁して八十路や磯菜摘む

山口雄二

鹿児島県俳人協会賞

風死すや深く刻みし噴火の碑 藤元睦子

優秀賞

火の山を蹴る逆上り鷹渡る 久永のり尾
火の島の鼓動にはじけ椿の実 上野ミチ子

爽やかやフェリーに夜勤明けの医師 前田浩海

甲板に供華抱く刀自や秋彼岸 山口雄二

秋冷や鍛一本の火山灰畑 上別府和代

箴音の絶えし蜚路地椿の実 中間恵子

熔岩垣や庭に広げし椿の実 窪昌子

渡り待つ鷹の目潜む熔岩岬 瀬戸清子

【当日句の部】

最優秀賞(レインボー桜島賞)

賜猛る島に数多の避難港 濱田彰典

優秀賞

噴火碑に風の私語あり椿の実 寶來喜代子

火山灰払ふ句帳に秋思たたみけり 菊地優子

きちきちの飛んで広げし熔岩の天 淵脇護

秋気澄む渚にかわく藻の匂ひ 藤元睦子

火の島を丸ごと背負ひ大根蒔く 谷口千枝子

磊々たる熔岩の尖りや賜猛る 五反田秋夫

飛び上がり飛びつき郁子の蔓を引く 桂豊子

火の島へ吾も旅人小鳥来る 福沢霧子

火山灰に生き火山灰に生かされ大根蒔く 徳田正樹

神殿の火山灰掃く祢宜や初紅葉 中間恵子

選者特選(五十音順)

大川畑光詳選

磊々たる熔岩の尖りや賜猛る 五反田秋夫

折田幸弘選

飛び上がり飛びつき郁子の蔓を引く 桂豊子

徳田正樹選

火の島を丸ごと背負ひ大根蒔く 谷口千枝子

中間秀幸選

神殿の火山灰掃く祢宜や初紅葉 中間恵子

長柄英男選

火の島や空家に太る椿の実 藤元睦子

濱田彰典選

石鳥居火山灰に埋りし百の秋 久永のり尾

淵脇護選

火の島を丸ごと背負ひ大根蒔く 谷口千枝子

寶來喜代子選

火山灰に生き火山灰に生かされ大根蒔く 徳田正樹

山之内赫子選

賜猛る島に数多の避難港 濱田彰典

和田洋文選

火山灰払ふ句帳に秋思たたみけり 菊地優子

私の吟行地(17) 季の移ろい―樹々に―

岩切 和子(湾)

そこは、一見何の変哲もない長い静かな一本道である。私はいつの頃からか、その通りにふらつと出掛けるようになっていた。そこは、出水の武家屋敷通りである。そこには、四季の樹々の移ろい姿がある。それだけのことであるが、私は見入ってしまった。しかし、以前の私はそうではなかった。殆ど行ったこともなかった。俳句が私をここへ誘ってくれたのである。

武家邑の淑気満つ中そりり歩を
冬には、枯木のような梢の先に、小枝が毛細血管を張り巡らせるように見える。やがてその枝先の小さな芽が、赤味を帯びて芽吹いてくると、辺りは一気に春色に変わってゆく。

木の形にどの木も芽吹く武家通り
武家通り梢どの木も春醸す

ように咲き誇り、道へ枝を差し伸べて甘香る。灰かに漂う。私には歩く。夏は、それらの樹は青々と茂り、緑陰を作ってくれる。途中には蕨の絡まる悪霊除けの石敢當もある。苔生して刻字は判読し難い。秋は、大樹の紅葉の移りゆく景色に魅了



される。石垣には石菫の花がざらりと顔を出す。お飯屋門のある小学校には、銀杏の大樹が秋空に映え、道黄葉が舞い散り、道を初める。麓歴史館の空には、棟の木が金鈴子を鳴らす。時には客を乗せた牛車も通る。

春雨の湿りを踏みて武家の庭
裸灯の似合ふ武家間や雛飾り
出水は身近な所に吟行場所が沢山ある。鶴の里は言うまでもない。私もその季は足繁く通う。
鶴唳の余韻の空や鶴引けり



鹿児島歳時記(15) 久見崎盆踊(想夫恋)

大川畑光詳(岬・若葉鹿児島)

久見崎盆踊は薩摩川内市久見崎地区で行われる盆踊りで、想夫恋とも呼ばれる。1957年(慶長2)豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、島津義弘率いる1万余の軍勢が、薩摩の軍港であった久見崎から出航した。翌年、豊臣秀吉の死により全軍を引き上げたが、兵士の中には戦死者も多かった。この戦死者の霊を慰めるために、久見崎の未亡人達の間で踊られるようになったのが、今の想夫恋の始まりという。現在は8月16日、川内川の河口左岸の日和見山にある慶長の役記念碑の前で行われる。この碑は東郷平八郎元帥の書になるもので、最初に「洲の番」に建立されたが、その後、上浜の松



林を経て、この地に移転された。女性達はお高祖頭巾に男物の黒紋付の羽織を着て、腰の後ろに脇差を差す。男物の羽織や脇差は夫の形見であり、頭巾で顔を隠すのも夫の霊を迎え慰めるといいう意味があるのだろう。盆踊りの古い形を残していると言える。

海へ手を合はせ始まる踊かな
三味線と太鼓の囃子に合せて唄われる七七五調の歌詞には亡夫を慕う、哀切な思いが込められている。一部を紹介したい。
お高祖頭巾に 腰巻き羽織
少しお顔を 見とうござる
寝ては考え 起きては想う
この身終わるまで 君のため
10人ほどの踊り手が
輪になって、合掌したり、手招きしたりする仕種を繰り返す。ゆっくりとしたテンポで厳かな印象を与える踊りである。

1971年(昭和46)に、鹿児島県無形民俗文化財に指定され、現在は婦人会を中心とした「久見崎盆踊保存会」が継承する。コロナ禍で中止が続いたが、今年には開催に向けて準備を進めるといふ。

夫恋ひの口説きに終はる踊かな

久見崎には川内原子力発電所があるが、さらに近年地区の活性化を目指す「川内港久見崎みらいゾーン」の大規模な造成工事が進み、景観も大きく変化しつつある。



小川莎良氏「角川春樹賞」に入選

未発表作品30句で勝負する俳句の「第43回角川春樹賞」で、河鹿無鑑査同人・河同人である小川莎良氏が最終選考に残ったが、残念ながら正賞には届かず、入選にとどまった。今後に期待したい。入選作から「春満月あした出荷の牛眠る 莎良」

(淵脇 護)

支部会員新刊句集紹介

◎第二句集『紋付鳥』竹下白陽

(私家版) 2022年3月刊) 竹下白陽氏は1925年生まれ98歳で、俳歴68年に及ぶ。現在「秋麗」(藤田直子主宰)会員。長年吟行で鍛えた写生眼に俳味が加わり、味わい深い作品を生んだ。また太平洋戦争で戦死した同輩たちの慰霊と戦争の記憶を語り継ぐという強い意志が感じられる。本句集は第62回俳人協会賞の第一次予選通過35編に残った。

元号を四代生きて目刺し焼く
掃き初めや紋付鳥の礼篤き

(大川畑光詳)

◎第一句集『花筏』正角三代

(喜怒哀楽書房) 2022年4月刊) 1940年6月茨城県生まれ。夫の父の急逝により、夫の生地出水市へ移住。現在「河鹿」同人。「河」同人。「公社」俳人協会会員。角川春樹氏の指示で「河」誌上に、井上純子・菊地悠太・梅津早苗・小林政秋・小川莎良・中村池塘子の六氏が鑑賞の論陣を張って好評だった。その作風は「骨格が正しく品格に富み、しかも心細かく柔らかない叙情を備えている」と評される。代表句「水の辺はいつも風ある花筏」

(淵脇 護)

◎鹿児島俳人協会合同句集『海紅豆』第14集

(ジャブプラン) 2022年12月刊)

鹿児島俳人協会は、1962年(昭和37)に発足し、令和4年に60周年を迎えた。協会は流派に関わらず県内全ての結社、俳句愛好者が集う全国的にも希有なものである。5年ごとに刊行してきた合同句集『海紅豆』は第14集となり、467名が参加している。明記されている生年で見ると、最年長は100歳の松下ヨシさん、最年少は23歳の山口尚子さんである。封切れば草の香放つ今年米 ヨシ 寒い日の私はきつとかじけ猫 尚子 これまでの中で最も多い参加者は第10集の877名で、その後減少を続けている。本集への四十代以下の参加者は8名に過ぎない。高齢者が松下さんのように長く楽しまれると同時に若手にも俳句の魅力を発信する努力が急務と言える。(大川畑光詳)

結社のニュース

「河鹿」

「河鹿」は令和5年3月号で、創刊以来276号に達した。コロナ禍で、会員の中にも感染者が出たが、4年後半から対面句会を注意深く継続中である。主宰の淵脇護は、昨年末に、角川「俳句」11月特集「自選力を鍛える」投稿直前まで推戴せよ、文學の森「俳句界」11月号の特集「感銘句ヒストリー」初学から現在まで、本阿弥書店「俳壇」5年1月号に「近詠8句」などを発表して気を吐いた。古典注釈や句集鑑賞240回、随筆随想、消息往来、自句自解、幽谷集と河鹿集の選評など多彩な読み物が充実してきた。(淵脇 護)

「ざぼん」

コロナも収まりつつあり、各句会も活発化してきたようである。全体の吟行会も総会で行う方向で意見がまとまった。坊津、枕崎は引き続き山之内赫子、寶來喜代子両氏が指導に当たっている。昨年からは城西公民館での公民館講座を長柄英男氏が毎月指導に当たっている。荒田句会では会場を喫茶メルヘンに変更して一年が過ぎた。ざぼん新春俳句大会を去年に引き続き1月22日に開催した。大会賞に坂口美恵子、次席に志戸岡久美子。両氏とも若手で今後の活躍が楽しみである。本年度のざぼん賞は馬場奈穂子、功労賞は久木田節子、新人賞には坂口美恵子を選ばれた。(折田幸弘)

「椽」

三浦亜紀子主宰の「椽」の令和4年度新人賞を寶來喜代子さんが受賞。

縄文の土器のこげ色甘藷焼く

大黒像並ぶ岸辺や瀬祭

蟻の列密商館へ荷を運ぶ

など、郷土色豊かな句が評価された。

これに続き、同人に推挙され、令和5年1月より「椽同人」として、頑張っている。

一昨年は宮地玲子さんが、椽の「第38回青蘆賞」を受賞。これに続く新人賞・同人と鹿児島椽は大喜びで、今年も前年に続いて鹿児島から同人が出ることを願っている。(山之内赫子)

「若葉鹿児島」

94年の歴史を有する「若葉」(鈴木貞雄主宰)は昨年12月、1118号をもって終刊した。若葉鹿児島句会は「岬」(成川雅夫主宰)に所属し、今後も俳誌「若葉鹿児島」を抛り所に活動を継続する。

代表は中間秀幸から大川畑光詳に交替し、幹事には中間恵子が就いた。会誌編集は池田貴之が担当する。「若葉」誌では、第69回若葉賞(結社賞)に庵崎京子が受賞。奄美大島の自然や生活を意欲的に詠んだ作品が評価された。大川畑代表が読売新聞の「薩摩よみうり文芸俳句」の選者を淵脇護氏から引き継いだ。(大川畑光詳)

「湾」

湾俳句会では毎月の湾誌発行、定例会の開催など滞ることなく、順調に実施している。また、各地区での吟行会や句会も充実しており、コロナ禍という状況の中でも工夫しながら実施できている。昨年九月には、暫く行われていなかった湾鍛錬会を一泊二日の日程で桜島や知覧を吟行地として行い、県内県外から多くの会員の参加を得ることができた。日と同じにして、大岳水一路遺句集『鶴仰ぐ』の出版記念祝賀会も実施することができ、先師を偲ぶとともに会員相互の親睦を深めることとなった。(濱田彰典)

深悼

今村 淑子(4・6・2)91歳(若葉)
訪へば涼しき声の応とあり

山下知世子(4・10・18) 95歳(若葉)
孫曾孫十一人に夏来る

上菌 樫夫(5・1・24)96歳(河鹿)
朱纒持ち替へ妻へ短き電話切る

会員紹介

赤星 貴子(昭和19年生/ざぼん・椽)



【俳歴】昭和43年ざぼん入会。米谷静二先生、昭和63年野村多賀子先生に師事。平成元年椽入会。徳留末雄先生を経て、現在山之内赫子先生に師事。

【信条】花鳥風月を旧仮名遣いで詠む。梨受粉励む親子のラジオ聞く

夕虹の中に納まる桜島
行く秋や三角兵舎吹きさらし
はやぶさの帰還の傷や寒波急
開聞岳見つつ三日の外湯なり

かねこ 金子 嘉仁(昭和22年生/ざぼん)



【俳歴】平成28年ざぼん入会。山之内赫子先生、折田幸弘先生に師事。

【信条】季語の本意を大切に内面に向き合う。

生きる意志一つ増やして屠蘇を酌む
黒うさぎ子と戯れる良夜かな
埋もれぬ鳥居拝する神の旅
生涯を島に埋めて茄子の花
つくしんぼ躡む童の声光る

なかま 中間 恵子(昭和19年生/わかば・岬)



【俳歴】昭和44年若葉・岬に入会。清崎敏郎先生・鈴木貞雄先生・勝又一透先生に師事。

【信条】客観写生にもとづく平明で叙情豊かな句を志す。

鷹匠の額赤銅に鷹放つ
落花霏霏交替に押す車椅子
都忘れ江戸紫は妣の花
手話の子と父に銀杏の散りやまず
水行の誦経荒べる追儼かな

なかしま 中島 典子(昭和23年生/岬)



【俳歴】平成25年若葉入会。鈴木貞雄・中間秀幸先生に師事。令和4年岬入会、同人。成川雅夫先生・大川畑光詳先生に師事。

【信条】自然をより深く愛し、感じ、学び、表現したい。

初夏の風ブラウスを膨らます
月光の降る湾央の桜島
錦江湾照るや島津の冬座敷
初午祭四肢軽妙に駒踊る
春の夜の文箱にしまふ文ひとつ

令和4年度新会員紹介



井手 恵子 (河鹿)

【俳歴】平成23年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿くす乃き俳句会所属。

合歓の花駆け込み寺の夕明り



今吉 信子 (河鹿)

【俳歴】平成25年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿くす乃き俳句会所属。

七竈三角点の見えて来ず



内田 敏子 (ざぼん)

【俳歴】平成27年ざぼん入会。山之内赫子先生に師事。現在しおさい句会所属。

雪舞へり双剣石を見て飽かず



久木田 節子 (ざぼん)

【俳歴】平成22年ざぼん入会。山之内赫子先生に師事。現在菜の花句会所属。折田幸弘先生に師事。

小流れの小石に跳ぬる水の春



國生 如庵 (河鹿)

【俳歴】平成27年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿ながつき俳句会所属。

言の葉のふ化せし刹那蝌蚪の水



迫口 君代 (河鹿)

【俳歴】平成12年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿明神俳句会所属。

仏間には常の一灯去年今年



中村 美智代 (ざぼん)

【俳歴】平成29年ざぼん入会。山之内赫子先生に師事。現在火の神句会に所属。

虹立つや色の引出し開けしまま



羽立 郁芳 (河鹿)

【俳歴】平成19年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿天降俳句会所属。

新住所宛ての荷物やつばめ来る



福元 さゆり (湾)

【俳歴】平成19年湾入会。大岳水一路先生に師事。瀬戸清子先生を経て現在、湾定例句会、和田洋文先生、伊集院句会、濱田彰典先生に師事。

海棠や花びらに紅薄く引き



藤崎 トク子 (河鹿)

【俳歴】平成16年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在、河鹿たちばな俳句会所属。

嬉しくも哀しくもある桜かな



森 重代 (河鹿)

【俳歴】平成22年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿天降俳句会所属。

十八の託す一票原爆忌



山下 啓子 (河鹿)

【俳歴】平成27年河鹿入会。淵脇護先生に師事。現在河鹿ながつき会所属。

冬麗やゆつくり登る女坂

◎役員交代について

令和5年度より副支部長を中間秀幸氏から山之内赫子氏へ、また鹿児島若葉の評議員を大川畑光詳、幹事を中間恵子氏に交代する。

【俳人協会鹿児島県支部役員】

- ▽淵脇護(支部長)▽山之内赫子(副支部長)
- ▽大川畑光詳(事務局局長)▽池田貴之(会計)
- ▽濱田彰典(監査)▽折田幸弘▽徳田正樹
- ▽中間恵子▽長柄英男▽寶來喜代子▽和田洋文

【編集室より】

コロナ禍で俳句大会の形式もあれこれ工夫してきましたが、春と秋の俳句大会は募集句と当日句の二本立てで開催されることが定着した。第3回春季俳句大会には103名、338句の投句があった。これまでの最高の数だ。会報にも多くの方が寄稿してくださった。心より感謝申し上げます。(大)

発行 俳人協会 鹿児島県支部

発行者 支部長 淵脇護

編集者・事務局 大川畑光詳

(TEL・FAX)〇九九・二四四・一八二〇

印刷 (株)朝日印刷